

体育授業経験が体育授業・スポーツ実施の愛好度に及ぼす影響 —楽しさ体験の視点から—

渋谷崇行* 小泉昌幸** 伊藤巨志***

(平成10年10月30日 受理)

The Effect of Experience in Physical Education Class on the Degree of Fan about Physical Education Class and Participation in Sport

Takayuki SHIBUKURA* Masayuki KOIZUMI** Kiyoshi ITOH***

The purpose of this study is to clarify the effect of experience in physical education class on the degree of fan about physical education class and participation in sport. In order to determine these assignments, questionnaire was administered to two hundred and fifty-six male and female college students.

First, the scale of experience in physical education class for each term (elementary school, junior high school and high school). As a result of factor analysis, three main factors were extracted respectively; "Pleasure", "Activity frustration", "Interpersonal frustration". These scales include 25-27 items and α -coefficients were enough high to support the high reliability of each factor.

Second, the results of analyses of variance on the degree of fan about physical education class in the scale of experience in physical education class for each term revealed that the subjects who answered Like showed higher in "Pleasure", the subjects who answered Dislike showed higher in "Activity frustration" and "Interpersonal frustration". And the results of analysis of variance on the degree of fan about participation in sport revealed much the same.

Finally, the significance of the study about physical education class given consideration from the viewpoint of sport independence was discussed.

Key words : physical education class, participation in sport, factor analysis, ANOVA

1. はじめに

生涯スポーツの重要性が指摘されて久しいが、平成元年の学習指導要領改定以来、学校体育の大きな使命として、生涯を通じてスポーツに親しむことのできる態度の育成を取り上げてきた^{4, 5, 6)}。学習指導要領保健体育科の目標に明確に示されている生涯スポーツの推進に向け、本来、学校体育には大きく二つの側面からの役割が期待されるといえよう。一つは生涯スポーツの準備段階としての体育授業、もう一つは生涯スポーツの一環としての体育授業である。これらは、レジャーのために準備する教育 (education for leisure) と、レジャーとしての教育 (education as leisure) と表すこともできる¹⁾。これら二つの側面から体育授業を捉えることの意義は、学習者と学習内容との関係において特に注目すべきことである。前者の立場からは、

*体育学 助手 **体育学 助教授 ***県立新潟女子短期大学

学習内容は生涯スポーツのために必要な知識や技術となり、それを身につけさせることを目標とする授業が展開される。後者の立場からは、学習内容は先と同様のことであるが、学習者と学習内容との付き合い方が異なる。つまり、体育授業にレジャーの性格をもたせ、スポーツの知識や技術の完成を前面に押し出すのではなく、技能を楽しむことに重点を置くことになる。レジャーとしての教育の考え方による、学習者と学習内容との関係は、「楽しむ」ことを重視することにより、学習者の内発的動機づけによる自発的学習の展開が期待できるといえる。しかし、これら二つの立場からの体育授業実践は、お互いを否定するものでは決してない。体育の目標は、学習者が生涯を通じてスポーツに親しむことができるよう導くことであるのだから、体育授業はレジャーの学習の場（準備段階）と位置づけられよう。それに加え、レジャー活動に近い環境を設定し、スポーツの楽しさを味わい追求していく中で、さまざまな問題を解決し学習を進めることは、実践に即した授業展開として大きな学習効果をあげるものと思われる。

前述したように、体育授業の中で楽しさを味わうことにより、内発的動機づけによる自発的な学習の展開が期待できる。逆に、楽しさを阻害されることは、自ら学習を進めていくことを困難にし、スポーツ場面や運動することそれ自体から遠ざかっていく可能性を秘めていることに目を向けるべきである。体育授業における楽しさは、運動することそれ自体にあるとともに、達成感や仲間との交流など、多くの要素を含むものである^{3, 8, 9, 10)}。そして、楽しさがそのようであるならば、スポーツ的自立を促す学習内容が運動場面の範囲に収まらないことから、学習者が体育授業そのものに魅力を感じる事がスポーツに対する興味や関心を抱くことにつながり、ひいては生涯スポーツ実践を促進することになるといえる。

本研究では、体育授業の楽しさに関わる経験を、調査対象者の過去の体験から調査している。そこで、体育授業経験を、楽しさを規定する要因と、楽しさを阻害する要因とから検討を試みた。それらが体育授業の愛好度とどのような関係であるのかを明らかにし、さらにはスポーツ実施の愛好度との関連についても同様の視点から検討を試みた。

2. 研究の方法

調査対象：本学学生1年生269名を対象として、平成10年7月に質問紙調査を行った。調査の方法は、授業時間を利用したクラスごとの一斉調査で、調査者が説明をしながら実施した。記入漏れや記入ミスがあったものを除き、有効回答者256名（有効回答率95.2%）を分析対象とした。

調査内容：西ら⁷⁾による調査項目を参考にし、体育授業において経験する楽しさ、及びそれを阻害する要因からなる調査票を作成した。項目数は小学校期、中学校期、高等学校期とも29項目である。回答に際しては、各学校期すべての項目に対して回答するよう指示し、それぞれ経験の度合いを4段階（「全く覚えがない(1)」「ほとんど印象に残っていない(2)」「いくらか印象に残っている(3)」「強く印象に残っている(4)」）で評価するよう求めた。

3. 結果および考察

3.1 体育授業の愛好度、及びスポーツ実施の愛好度について

Fig.1は、小学校、中学校、高等学校のそれぞれの時期における、調査対象者の体育授業の好き嫌いについて、その割合を示したものである。同様に、Fig.2はスポーツ実施の好き嫌い

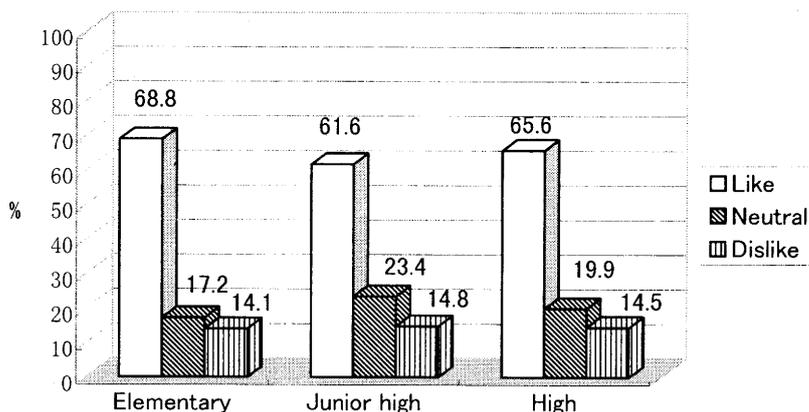


Fig.1 The rate of degree of fan about physical education class in the past

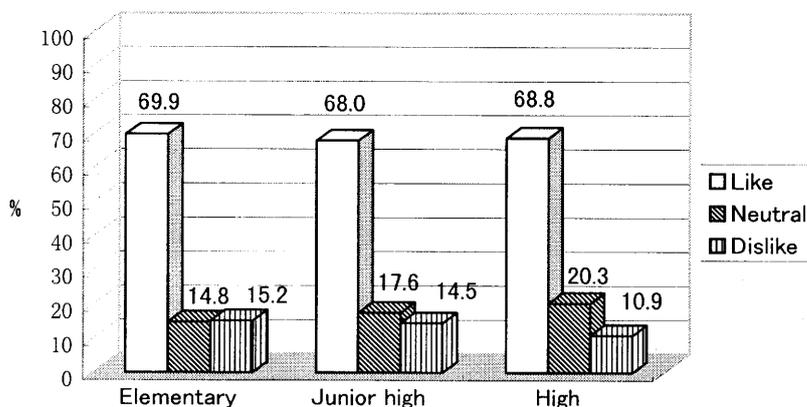


Fig.2 The rate of degree of fan about participation in sport class in the past

の割合を示している。

体育授業を好きであったと答えた者の割合は、小学校期 68.8%, 中学校期 61.6%, 高等学校期 65.6% であり、いずれの学校期においても 60% を超えていた。体育授業の愛好度は比較的高いようであったが、中学校期にはその割合はわずかに減少傾向を示していた。次に、スポーツ実施の好き嫌いの割合であるが、小学校期 69.9%, 中学校期 68.0%, 高等学校期 68.8% であり、いずれの学校期とも、好きであると答えた者の

割合は 70% に近い値であった。また、嫌いであると答えた者の割合は、進学とともに減少の傾向を示していた。以下の分析では、各学校期における体育授業、及びスポーツ実施に対する愛好度別の 3 群（好き、どちらともいえない、嫌い）を、本研究における比較の対象として取り上げ、体育授業経験の分析を試みている。

3.2 体育授業経験の因子構造

小学校期、中学校期、高等学校期のそれぞれにおける体育授業経験の因子構造を明らかにするため、それを表す 29 項目に対して、主因子法、及びバリマックス回転により因子分析を行った。各学校期とも固有値 1 以上の基準で 6 因子が抽出されたため、2 因子解から 6 因子解までの場合を順次検討した。その結果、解釈可能性において最も優れていたのは、各学校期とも 3 因子解であった。Table1-3 は、それぞれの学校期における体育授業経験を表す各因子の固有値、寄与率、 α 係数、因子負荷量が 0.4 以上であった項目と、その因子負荷量をまとめて示したものである。

Table1 Factor structure in elementary school term

no.	Item	Factor loading
F1 Pleasure Eigenvalue=6.36, Pct of var=21.9, $\alpha=0.89$		
6	うまくできたり頑張ったときに仲間や先生が認めてくれた	0.697
5	仲間と教えあったり協力できた	0.696
13	自分の考えを自由にからだで表すことができた	0.678
3	運動によってからだや心がすっきりした	0.668
9	技能や記録が伸びた	0.648
14	自分で、または仲間と考えたり工夫できた	0.623
4	みんなと仲良くできた	0.604
7	好きな運動ができた	0.587
11	いろいろな運動ができた	0.560
2	精一杯からだを動かすことができた	0.550
1	身体のためになる運動ができた	0.536
12	運動の仕方など、わからなかったことがわかるようになった	0.527
10	できなかった運動ができるようになった	0.521
8	仲間とゲームやリレーで勝ち負けが競えた	0.520
F2 Activity frustration Eigenvalue=3.40, Pct of var=11.7, $\alpha=0.80$		
24	好きな運動をやらせてもらえなかった	0.729
25	授業では自由にやりたいことができなかった	0.661
27	いろいろな運動種目をやらせてもらえなかった	0.609
23	基本ばかりでゲームをやらせてもらえなかった	0.571
29	よく教えてもらえなかった	0.496
17	授業では思いきり運動できなかった	0.485
28	自分たちだけで考えたり工夫したりさせてもらえなかった	0.452
F3 Interpersonal frustration Eigenvalue=1.31, Pct of var=4.5, $\alpha=0.75$		
21	上手な人と差別された	0.723
20	みんなの前で比較された	0.610
16	うんざりするほど運動させられた	0.530
18	失敗したとき仲間から責められた	0.520
22	自分は運動が苦手だった	0.503
19	チームのまとまりがなかった	0.419

まず、第1因子に含まれる項目は各学校期とも同じであり、「うまくできたり頑張ったときに仲間や先生が認めてくれた」「運動によってからだや心がすっきりした」など、体育授業で楽しかったりよかったと感じた、学習者の満足を示す14項目で構成されていた。したがって、この因子は「I 楽しさ・喜び(Pleasure)」に関する因子であるといえる(小学校期14項目;寄与率21.9%, $\alpha=0.89$;中学校期14項目;寄与率27.3%, $\alpha=0.92$;高等学校期14項目;寄与率27.8%, $\alpha=0.92$)。また、第1因子に含まれた14項目は、西ら⁷⁾の研究における、体育授業で「楽しかった」「よかった」と感じた体験を表す全ての項目であり、本研究では、楽しさや喜びを表す内容は、1因子構造であることが示された。次に、第2因子に含まれる項目は、「授業では自由にやりたいことができなかった」「好きな運動をやらせてもらえなかった」など、自身の運動欲求を満たすことのできない不満を示す項目で構成されていた。各学校期によって多少の項目の違いはあるものの、いずれの内容も運動欲求における不満を表している。したがって、この因子は「II 活動的不満(Activity frustration)」に関する因子であるといえる(小学校期7項目;寄与率11.7%, $\alpha=0.80$;中学校期7項目;寄与率9.2%, $\alpha=0.82$;高等学校期5項目;寄与

Table2 Factor structure in junior high school term

no.	Item	Factor loading
F1 Pleasure Eigenvalue=7.92, Pct of var=27.3, $\alpha=0.92$		
6	うまくできたり頑張ったときに仲間や先生が認めてくれた	0.751
3	運動によってからだや心がすっきりした	0.712
12	運動の仕方など、わからなかったことがわかるようになった	0.708
9	技能や記録が伸びた	0.692
5	仲間と教えあったり協力できた	0.690
8	仲間とゲームやリレーで勝ち負けが競えた	0.651
2	精一杯からだを動かすことができた	0.648
4	みんなと仲良くできた	0.636
13	自分の考えを自由にからだで表すことができた	0.626
10	できなかった運動ができるようになった	0.621
11	いろいろな運動ができた	0.615
14	自分で、または仲間と考えたり工夫できた	0.578
7	好きな運動ができた	0.558
1	身体のためになる運動ができた	0.505
F2 Activity frustration Eigenvalue=2.68, Pct of var=9.2, $\alpha=0.82$		
24	好きな運動をやらせてもらえなかった	0.778
25	授業では自由にやりたいことができなかった	0.748
27	いろいろな運動種目をやらせてもらえなかった	0.697
23	基本ばかりでゲームをやらせてもらえなかった	0.527
28	自分たちだけで考えたり工夫したりさせてもらえなかった	0.482
29	よく教えてもらえなかった	0.470
17	授業では思いきり運動できなかった	0.412
F3 Interpersonal frustration Eigenvalue=1.54, Pct of var=5.3, $\alpha=0.73$		
18	失敗したとき仲間から責められた	0.715
20	みんなの前で比較された	0.707
21	上手な人と差別された	0.647
19	チームのまとまりがなかった	0.496

率 9.8%, $\alpha=0.82$). 最後に, 第3因子に含まれる項目は, 「みんなの前で比較された」「上手な人と差別された」など, 体育授業において恥ずかしい思いをしたり, 惨めな思いをした経験を示す項目で構成されていた. 第2因子同様, 各学校期によって多少の項目の違いはあるが, これらは, 失敗や運動が苦手であるなどの原因により, 他者との関係において不満を味わった経験を表している. したがって, この因子は「III 対人的不満(Interpersonal frustration)」に関する因子であるといえる(小学校期 6項目; 寄与率 4.5%, $\alpha=0.75$; 中学校期 4項目; 寄与率 5.3%, $\alpha=0.73$; 高等学校期 6項目; 寄与率 4.8%, $\alpha=0.74$).

以上, 抽出された3因子の累積寄与率は, 小学校期 38.2%, 中学校期 41.9%, 高等学校期 42.4%であり, また, 各因子における α 係数は, それぞれ 0.75-0.89, 0.73-0.92, 0.74-0.92であった. 各学校期とも, 下位因子は比較的一貫性の高い項目で構成されていることが示された. このように, 各学校期における体育授業経験は, ほぼ同様の因子で構成されているといえる. また, 「I 楽しさ・喜び」は楽しさを規定する要因として, 「II 活動的不満」及び「III 対人的不満」は楽しさを阻害する要因として, それぞれ捉えることができよう. これら3因子に含まれる項目を体育授業経験をあらわす下位尺度として, 以下の比較を試みた.

Table3 Factor structure in high school term

no.	Item	Factor loading
F1 Pleasure		
Eigenvalue=8.07, Pct of var=27.8, α =0.92		
3	運動によってからだや心がすっきりした	0.706
14	自分で、または仲間と考えたり工夫できた	0.706
2	精一杯からだを動かすことができた	0.699
9	技能や記録が伸びた	0.682
12	運動の仕方など、わからなかったことがわかるようになった	0.682
13	自分の考えを自由にからだて表すことができた	0.663
10	できなかった運動ができるようになった	0.659
1	身体のためになる運動ができた	0.650
6	うまくできたり頑張ったときに仲間や先生が認めてくれた	0.649
7	好きな運動ができた	0.544
5	仲間と教えあったり協力できた	0.625
11	いろいろな運動ができた	0.575
8	仲間とゲームやリレーで勝ち負けが競えた	0.519
4	みんなと仲良くできた	0.491
F2 Activity frustration		
Eigenvalue=2.83, Pct of var=9.8, α =0.82		
25	授業では自由にやりたいことができなかった	0.812
24	好きな運動をやらせてもらえなかった	0.794
27	いろいろな運動種目をやらせてもらえなかった	0.629
23	基本ばかりでゲームをやらせてもらえなかった	0.524
28	自分たちだけで考えたり工夫したりさせてもらえなかった	0.496
F3 Interpersonal frustration		
Eigenvalue=1.40, Pct of var=4.8, α =0.74		
20	みんなの前で比較された	0.650
21	上手な人と差別された	0.623
18	失敗したとき仲間から責められた	0.609
16	うんざりするほど運動させられた	0.506
22	自分は運動が苦手だった	0.476
19	チームのまとまりがなかった	0.455

3.3 体育授業の愛好度による体育授業経験の比較

抽出された体育授業経験下位尺度のそれぞれの得点に対し、調査対象者を体育授業の愛好度により3群に分類し、3群間の体育授業経験を比較した。Table4は、各学校期における体育授業経験の体育授業愛好度別平均得点、標準偏差、及び一元配置分散分析の結果を示したものである。小学校期における「II 活動的不満」については有為差は認められたのだが、それ以外の比較については、小学校期、中学校期、高等学校期とも3群間に差異が認められた。いずれの学校期においても、「I 楽しさ・喜び」については体育授業が好きと答えた群の方が高得点を示し、また、「II 活動的不満」及び「III 対人的不満」については体育授業が嫌いだと答えた群の方が高得点を示していた。体育授業における楽しさや喜びの体験は、体育授業そのものを好きにさせる効果があると考えられ、逆に、運動欲求や人間関係に関する不満の体験は、体育授業を嫌いだと評価する要因になると考えられる。

さて、「I 楽しさ・喜び」の項目には、技能や記録が伸びたことや、できなかった運動ができるようになったことが含まれる。そうした、上達することそれ自体に学習者は喜びを感じるで

Table4 The results of ANOVA for degree of fan about physical education class

Term	Group						F-value	Significance
	Like(n=176)		Neutral(n=44)		Dislike(n=36)			
Elementary school	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
I Pleasure	39.31	(7.70)	34.18	(7.97)	29.53	(6.40)	28.766	p<0.001 L>N>D
II Activity frustration	9.70	(3.05)	10.32	(2.81)	10.64	(3.53)	1.794	n.s.
III Interpersonal frustration	7.38	(2.41)	7.66	(2.74)	9.08	(3.21)	6.499	p<0.01 L,N<D
Junior high school	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
I Pleasure	41.22	(8.30)	33.46	(6.63)	30.21	(6.25)	43.673	p<0.001 L>N,D
II Activity frustration	9.70	(3.34)	11.28	(2.80)	11.61	(3.57)	8.473	p<0.001 L<N,D
III Interpersonal frustration	7.27	(2.55)	8.03	(2.73)	8.47	(2.59)	4.202	p<0.05 L<D
High school	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
I Pleasure	42.80	(8.20)	36.08	(8.22)	29.05	(7.55)	48.990	p<0.001 L>N>D
II Activity frustration	8.74	(2.96)	9.94	(3.41)	11.11	(3.98)	9.384	p<0.001 L<D
III Interpersonal frustration	6.35	(2.14)	7.49	(2.48)	7.95	(2.89)	9.817	p<0.001 L<N,D

あろうし、また、それに伴う自信は学習者の活動を意欲的にし、積極的に楽しさを享受できる態度も備わるはずである。それゆえ、学習者がスポーツ技術をよりよく習得し、さらに、「できた」という感情を実感として味わうことにより、単に技術の上達、完成にとどまることなく、体育授業に対する姿勢までも効果的に機能したものと考えられる。このような結果は、体育授業の愛好度と得意度との密接な関係を示した西ら⁷⁾の研究を支持するものである。また、教師や仲間等の他者とのふれあい、運動することそれ自体の爽快感も、体育授業に楽しさ、喜びを感じる重要な経験である。楽しさ体験が体育授業の愛好度に影響を及ぼすことを、本調査結果は証明したといえる。次に、「II 活動的不満」及び「III 対人的不満」が、体育授業の愛好度に対してマイナスに作用したことについては、以下のように考えられる。前者は体育授業において自分が行いたい内容を行えなかったことによる不満を、後者は人間関係に基づく不満、つまり他者からの承認が得られないことによる不満をそれぞれ表していた。学習者が希望する内容、つまり行われている授業の内容に関する不満は、それを不可能たらしめた体育授業そのものに向けられるであろう。また、たとえ授業の内容が不満を抱くものではなかったとしても、授業時間内で自尊心を傷つけられるようなことがあれば、それを経験した場としての体育授業に良い思いを抱くことはないと考えられる。そうした体育授業での経験は、体育授業に対する不満とともに、学習する意欲までも奪いかねないであろう。このような理由により、「II 活動的不満」及び「III 対人的不満」は、体育授業の愛好度に対してマイナスに作用したものと考えられる。

3.4 スポーツ実施の愛好度による体育授業経験の比較

抽出された体育授業経験下位尺度のそれぞれの得点に対し、調査対象者をスポーツ実施の愛好度により3群に分類し、3群間の体育授業経験を比較した。Table5は、各学校期における体育授業経験のスポーツ実施愛好度別平均得点、標準偏差、及び一元配置分散分析の結果を示したものである。小学校期における「II 活動的不満」については有為差は認められたのだが、

Table5 The results of ANOVA for degree of fan about participation in sport

Factor	Group						F-value	Significance
	Like(n=179)		Neutral(n=38)		Dislike(n=39)			
Elementary school	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
I Pleasure	39.20	(7.80)	33.89	(7.78)	30.28	(6.77)	25.550	p<0.001 L>N,D
II Activity frustration	9.92	(3.07)	9.87	(2.91)	10.08	(3.42)	0.051	n.s.
III Interpersonal frustration	7.37	(2.30)	7.66	(2.78)	9.00	(3.53)	6.296	p<0.01 L<D
Junior high school	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
I Pleasure	40.68	(8.32)	33.87	(6.36)	28.95	(5.84)	42.480	p<0.001 L>N>D
II Activity frustration	9.91	(3.31)	11.20	(2.80)	11.68	(3.80)	4.805	p<0.01 L<D
III Interpersonal frustration	7.09	(2.41)	8.76	(2.61)	8.81	(2.87)	12.591	p<0.001 L<N,D
High school	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
I Pleasure	42.34	(8.70)	35.83	(7.80)	28.25	(6.46)	40.930	p<0.001 L>N>D
II Activity frustration	8.98	(3.06)	9.58	(3.63)	11.00	(3.78)	4.790	p<0.01 L<D
III Interpersonal frustration	6.45	(2.13)	7.27	(2.67)	8.18	(3.00)	7.761	p<0.001 L<D

それ以外の比較については、小学校期、中学校期、高等学校期とも3群間に差異が認められた。いずれの学校期においても、「I 楽しさ・喜び」についてはスポーツを行うことが好きと答えた群の方が高得点を示し、また「II 活動的不満」及び「III 対人的不満」についてはスポーツを行うことが嫌いだと答えた群の方が高得点を示していた。このような傾向は、体育授業の愛好度による比較と同様であり、体育授業経験により規定される体育授業の愛好度が、直接スポーツ実施の愛好度を規定する要因となる可能性をも示唆するものである。

さて、「I 楽しさ・喜び」は、技能や記録が伸びたことやできなかった運動ができるようになった体験、そして、教師や仲間等の他者とのふれあいや、運動することそれ自体の爽快感による楽しさや喜びを表していた。先に議論されたとおり、これらの経験は体育授業に対する姿勢にまでも効果的に機能し、その愛好度とは密接な関係を示すものであった。ところで、体育授業はスポーツを教材とする教科であり、そこにおける楽しさや喜びの体験は、スポーツの特性に触れることによるものである。つまり、体育授業の中で楽しさ体験をし、スポーツの特性に触れることにより、そうした経験は体育授業の域を越え、自身のスポーツ実施に対しても興味や関心を抱くに至ったと考えられる。そのようなことから、体育授業における楽しさや喜びの経験は、スポーツ実施の愛好度に対してマイナスに作用したことについても、同様の視点から考えることができる。つまり、自らのスポーツ欲求を満たすところにスポーツの特性に触れる意義が見出せることに対し、両者はともに、体育授業においてスポーツの特性に触れることを阻害する要因を表すものであった。これらスポーツの特性である楽しさや喜び等を阻害するような経験は、スポーツ実施の重要な動機であるスポーツそのものに対する興味や関心を抱くことを困難とする。このようなことから、体育授業において、教材としてのスポーツ活動において体験した不満感は、スポーツ場面そのものを自分自身から遠ざける方向に作用したと考えられる。

4. 結論

本研究の目的は、体育授業経験を、楽しさを規定する要因と楽しさを阻害する要因から捉え、それらが体育授業の愛好度、さらにはスポーツ実施の愛好度とどのような関連があるのかを検討することであった。

検討の結果、体育授業経験の因子構造は各学校期とも同様の3因子が認められ、それぞれ「I 楽しさ・喜び」「II 活動的不満」「III 対人的不満」に関する因子であることが示された。また、各学校期における体育授業経験は、体育授業の愛好度、スポーツ実施の愛好度と関連しているということが示された。これらの結果から、生涯スポーツという観点から体育授業を捉えたとき、そこにおける楽しさや喜びの体験は、スポーツ実施を促すうえで必須の条件であるといえるであろう。また、楽しさや喜びを阻害するような体験は、スポーツに対する興味や関心を損なうという点で、できるだけ取り除くよう努めるべき事項といえる。

ただし、このことは、体育授業の全てにおいて学習者に楽しさや喜びを味わわせ、不満の感情を抱くことのない環境をあらかじめ用意することを意味するものでは決してない。体育の目標が、生涯を通じてスポーツに親しむことのできる態度の育成とするならば、授業の内容は目標に沿ったものでなくてはならない。学習者がその内容の目指すところを理解できていない状態、つまり、学習者自身がここで何を学ぼうとしているのかを理解できていない場合、実際に授業で取り上げられた内容に対して、学習者が不満を感じることもあるであろう。今回の調査が、学習者である調査対象者の主観的な評価であるため、そこでの授業目標や内容を含めた考察は不可能であるが、これから学習すべき内容を、教師が学習者に明確に理解させたうえで授業を行うことは必要であるといえる。そうすることにより、学習者も一つひとつの活動に意味づけすることができ、主体的に学習に取り組むことができるようになるといえよう。また、そうでなければ、自身の関心のある部分にのみ楽しさや喜びを感じることにしかできず、必要以上に不満感情を持ち得ることにもなる。

さらに、人間関係に関わるストレス場面も、生涯スポーツを実現する態度の育成のためには重要な学習場面として前向きに捉える必要がある。体育授業を離れ、仲間や職場、あるいは地域社会などでのスポーツ参加をより一層促進するには、他者とのコミュニケーションを含めたソーシャルスキルが大きく関わってくる。問題とされる場面において教師が適切な指導を行うことにより、その場がスポーツにおける仲間の重要性を学ぶ機会になるとともに、それを契機として、他者との関係を築く術が備わることも期待できよう。

本研究では、生涯スポーツの観点から体育授業を、楽しさ体験の側面から検討を試みている。今後は、「生きる力」^{1, 2)}を育む場としての体育の立場から、楽しさを単に学習者の欲求を満たすための条件として捉えるのではなく、スポーツ的自立を支える学習者の主体的な営みの原動力となるもの、あるいは、その成果として評価される必要がある。体育授業が生涯スポーツの一環であるとともに、学習の場であるからには、楽しさのこのような捉え方は適切であるといえる。

References

- 1) 中央教育審議会. 幼児期からの心の教育の在り方について (答申). 1998 (6月)
- 2) 保健体育審議会. 生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育

- 及びスポーツの振興のあり方について（保健体育審議会答申）. 1997
- 3) 井筒次郎・鈴木漠. 高等学校における「体育理論」の指導に関する一考察. 日本体育大学紀要 27-2 : 293-300. 1998
 - 4) 文部省. 中学校指導書保健体育編. 大日本図書株式会社 : 東京, 1989
 - 5) 文部省. 高等学校学習指導要領解説保健体育編体育編. 東山書房 : 京都, 1989
 - 6) 文部省. 小学校指導書体育編. 東洋館出版社 : 東京, 1989
 - 7) 西順一・橘川真彦. 体育授業における運動の楽しさの実態及び生涯スポーツとの関連. 体育社会学研究会編. 東京体育授業の社会学. 道和書院 : pp. 41-62. 1980
 - 8) 太田雅夫・小泉昌幸・須田洋・木村博人・鈴木良則・須田柳治. 体育授業と生徒の感情. スポーツ方法学研究 4-1:9-15. 1991
 - 9) 太田雅夫・松井瑞江・小泉昌幸・須田洋・川生邦夫. 大学体育への態度に関する一考察-本学学生の意識調査から-. 立正大学教養部紀要 23 : 35-43. 1989
 - 10) 須田洋・小泉昌幸・太田雅夫・須田柳治・三浦康暢. スポーツ種目に関する生徒の意識構造-高等学校体育授業におけるソフトボール, テニス, バドミントン, 卓球に対して-. スポーツ方法学研究 3-1 : 63-69. 1990
 - 11) S. Parker. The Sociology of Leisure. International Publications Service. 1976